

## 第23回いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門

### 『Che cos'è un bambino?』 講評

こどもって、本当にいろいろですよ。そんな子どもたちの魅力あふれる個性を、インパクトの強いイラストと、詩を思わせるような文章でつづって、イタリアの内外で高く評価されたのが今回の課題テキストです。知っている単語も多いし、短い文章がつながっているだけだし、一見したところ簡単そうに思えるのですが、じつはこういう絵本ほど訳すのが手ごわいものです。bello, grande, gentile, felice, cattivo... 身近でよく使われる形容詞は奥が深く、何通りもの訳し方が考えられ、ひとつの訳語を決めるまでにとっても時間がかかります。では、どうしたらいいのか。知らない単語をひと通り調べおえて、全体の流れを理解できたら、いったん辞書から離れ、イタリア語のテキストと絵だけと向き合ってみましょう。そうすると、原文のリズム、作者の声、意図が感じられるようになり、そこに描かれている情景が立ちあがってきます。たくさん子どもたちの顔が頭に浮かんできたらしめたもの。個々のイメージを、日本語にうつしとるのにいちばんぴったりの訳語をさがっていくのです。

**Un bambino è una persona piccola.** という最初の文章からして悩めますよね。「子どもだって、小さいけれど、一人前の人間なんだよ」というのが、きっと作者の言いたいことなのでしょう。それをくみとったうえで、でも、リズムを損なわないように、あまり余計な単語はつけくわえずに訳してあげましょう（しかも、これは、タイトルの **"Che cos'è un bambino?"** の答えになっていることも忘れてはいけません）。「こどもってね ちいさなひとなんだ」というような訳がしっくりくるのではないのでしょうか。

その後は、**i bambini** と **i grandi** の対比で物語が進んでいきます。イタリア語は主語を省略する傾向にありますから、個々の動詞の主語、あるいは代名詞が何を指しているのか、その根本的なところを見失わないように気をつけてください。たとえば、6 ページ **fanno loro spalancare la bocca** の **loro** は、大人たちを指しています。いっぽう、**fanno** の主語は、ここでは **le idee dei bambini** ですね。（子どもたちのアイデアは）「おとなたちに口をあぐりとあけさせる」という意味になります。また、14 ページの、**fanno finta di non vedere niente** は、その直前の文章が、**i bambini non se ne accorgono** ですから、主語はそのまま「子どもたち」です。（大人たちが泣いているのを見ても、子どもたちは）「なんにも みてないふりを することもある」といった訳になります。（大人たちが）「なっていないふりをします」という間違いが目立ちました。同様に、16 ページの、**i bambini vogliono essere ascoltati con gli occhi spalancati** の、**con gli occhi spalancati** は大人たちの様子です。**Vogliono essere ascoltati** は、**essere**+過去分詞ですから、受け身形。つまり、「こどもは じぶんのはなしを、めをまるくしながら きいてほしいんだ」というような訳になります。

子どもの豊かな個性を称える絵本ですから、なるべく、子どもに寄り添った言葉を選んであげたいですね。たとえば24ページ、ヘンな子、チビな子、ふとった子（**tondo**を、**tonto**と読み違えていた人もかなりいました！）といった否定的なニュアンスの形容詞の羅列にはしたくありません。最優秀賞の方は、こんなふうに訳してくれました。「みんなとはすこし ちがう子もいるよ。ちっちゃい子 まんまるな子 しずかな子。メガネの子や くるまいすの子も。あの子は 歯に キラッとひかる器具を つけて いるね」。リズム感もみごとですし、「歯科矯正器具」といった、難しい単語をうまく避けながらも、挿絵と一体化して、意味がしっかり伝わる訳文となっています。

イタリア人は修辞疑問文が好きだということも頭の隅においておくといいでしょう。この絵本では、32ページの **Ma a che importa pensarci adesso?** が修辞疑問文にあたります。直訳すると、「今、それを考えることが何の役に立つのだろうか?」という意味ですが、実際に「何の役に立つのか」に対する答えを知りたいわけではなくて、「なんの役にも立たないじゃないか」と言いたいのです。「だけど、そんなこと いまかんがえなくたっていいんじゃない?」 といった訳がふさわしいでしょう。ちなみに、**a che importa?**（何の役に立つ?）と、**Che cos' è importante?**（大切なものは何?）は、前者は **importare** という動詞、後者は **importante** という形容詞で、意味が異なりますので、混同しないように気をつけてください。

以下に、そのほか間違いの目立った箇所をいくつかあげておきます。

・2ページ **Cresce senza neanche farci caso:** 「(自分でも) 気づかないうちに (いつのまにか) 大きくなります」という意味です。**senza neanche** で二重否定。**farci caso** は、「そのことに気づく」という意味です。

・8ページ **tutte le sere**, 10ページ **tutti i giorni** : これらはいずれも複数形ですので、「毎晩」、「毎日」という意味です。単数形の **tutta la sera**(一晩中)、**tutto il giorno**(一日中) と混同しないようにしましょう。基本的なことですが、間違えた方が意外に多かったので挙げておきます。

・10ページ **ma come si fa?** : この **si** は、非人称の **si** です。「どうしたら、そんなことができるの?」という、子どもの素朴な気持ちをあらわした疑問文ですね。

・12ページ **piangono forte, per farsi sentire bene** : 使役の **fare** を見落とさないようにしましょう。**per farsi sentire bene** は、「(自分の声を相手に) よく聞いてもらうために」、**fare** がなくて、**per sentirsi bene** となると、「(自分の)気分がよくなるために」です。

・14ページ **Non piangono quasi mai, ~ piangono piano.** : この一文は、文節の順番を入れ替えてしまうと、意味が微妙に違ってしまいますので、前から忠実に訳すようにしましょう。(大人たちは)「ほとんど泣くことがない。→シャンプーが鼻に入っても泣か

ない。→もし泣くことがあるとしたら、→ こっそり泣く」というふうにつながっていきます。

・16ページ **le paure degli altri** : これは、「知らない人を恐れる気持ち」ではなく、「まわりの人の恐怖心」まで、子どもは敏感に吸い取ってしまう、という意味です。

・18ページ **talmente grande che le città non esistono** : 少々わかりにくい文章ですが、「町という境なんて消えてしまうほど、大きな世界」というイメージです。

**talmente... che** ~ 「あまりに…なので～である」という構文を見落とさないようにしてください。

・30ページ **i baffi all'insù** ぐるりと上にまいた口ひげ **all'insù** を「口の上に」と訳したケースや、あるいは **all'insù** が訳しにくかったからか、無視して訳していた方が多かったです。「カイゼルひげ」は、たしかに正確な訳ではありますが、果たしてどれくらいの子どもの理解できるか、ということも考えるようにしましょう。

・30ページ **Faranno i capricci per delle cose strane come un telefono che non suona o il traffico. : il traffico** は、ここでは「交通渋滞」という意味です。**fare i capricci** は、「大騒ぎをする」ぐらいのニュアンスで使われています。「でんわがかかってこないとか、みちがこんでいるとか、へんなことでふきげんになってるかもしれないね」。

・34ページ **Ora, per addormentarsi, ha bisogno degli occhi gentili** : 「(子どもたちは) いまは、眠るために、やさしく見守ってくれるまなざしを必要としている」という意味です。**ora** を時間ととり、「眠る時間だ」とした訳が見受けられました。

最後に文体にかんすることですが、子どもに語りかけるような口調で訳すのはいいのですが、文末が単調にならないように注意してください。とくに、「～んだよ」、「～わ」、「～でしょう」といった文末がずらりと続くと、読んでいるうちに耳障りになってしまいます。自分の文章の癖は、自分では気づかないものなので、訳文が仕上がってから、絵本（もしくは本）をたくさん読んでいそうな人を見つけて読んでもらうといいでしょう。繰り返しになりますが、絵本のように、声を出して読むことが想定される作品ではとくに、原文から響いてくるリズムによく耳を傾けながら翻訳する必要があります。おなじリズムで訳してあげると、音読したときに耳に心地いいだけでなく、文字数も絵本のおなじスペースにすっぽり納まるようになります。自分の大切な人に、何度も繰り返し読んであげたくなるような訳文を目指してください。

[文中のページ数は、タイトルページを1ページ目としてカウントしたものです]